魔法の家

thinkscod

“近代化”とは真逆を突き進んでいるように思える細くて古いコンクリート鋪装の道が交差する下町。大きな国道から離れるように入り組んだ道を歩いていくと、天井の高そうな木造町屋の密集した場所が姿を見せた。
好右 浩二(こうゆう　こうじ)は朝の光が満たされた心地よい空気を胸いっぱいに吸い込むと、戸を開け放つ。赤みかかった木の床を太陽の光が照らすと同時に、部屋の中が一気に暖かくなる。自分で屋内を改装、修繕する事を条件で大家さんから提示された家賃は月三万八千円だった。
「お腹空いた……」
もう何十年も規則正しく訪れている朝の時間なのに、それすら今の浩二には初めて体験している事のように思える。敷いていた布団を片付けると、心地よい音を立てて床板を軋ませながら台所へ向かった。

台所は土間になっていて住宅スペースより低く、昔ながらの薪を使う竈が二つ並んでいたる。釜に背を向けるように戸が付いていないオープンの木棚置いてあり、調味料や食材、食器などが置かれていた。浩二は棚の前に屈み込んで、置かれている瓶を物色していく。
「蓮根、牛蒡、胡瓜のピクルスに……」
このピクルスは浩二が引っ越してくる前から作り続けていたモノで、今では十種類を越えていた。実を言うと、前に住んでいた部屋では置く場所が足りなくて……困っていたこともある。
不意に、土壁の部分に吊しておいた五連状の風水の玉がぶつかり合って鈍い音を奏で始めた。
「何だ、もう来たのか……」
浩二が台所から居間の方へ目線を移すと、部屋の隅に小型薪ストーブと一緒に置いた小さなスツールに一人の女性が腰掛けている。山桃で染めた薄いピンク色の着物を着ているその女性は、膝下が透けてスツールを見る事ができた。

「あら、浩二。朝最初に顔を合わせて出てくる言葉は“何だ”……なの？」
彼女は着物がスレる音すら立てずにスツールから立ち上がると、居間の南寄りに置いてあるダイニングテーブルへゆっくりと移動していった。
「……ゴメン、言い直すよ。おはよう、ウカノ」
浩二はその場で立ち上がって姿勢を正すと、軽くおじぎをする。浩二がウカノと呼んだその女性はどうやらスツールに取り憑いている『付喪神』らしく、彼がこの場所を改装するために下見へ訪れたときからここに存在していた。さすがに膝下が透けているだけあって、普通の人には彼女の事を見ることができない。
「はい、おはよう。これで、美味しく朝ご飯がいただけるわね」
浩二にウカノと呼ばれた女性は、怒っていそうな表情をようやく崩して見せた。

「そういえば……」
ウカノが意味ありげに言葉を切ったので、浩二は扉を開けて中を確認していた目線を彼女の方へ向ける。
「朝食振る舞い週間も今日で終わりなのね」
これも大家さんから言われていたことの一つで『この木造屋敷が密集している路地へ引っ越してきた新入居者は、ご近所を招いて朝食を振る舞うこと』というのがあった。ご近所付き合いへ円滑に溶け込んでいくためのイベントらしい。一応、“おかわりをしてはいけない”、“出された料理に文句を言ってはいけない”という決まり事は存在しているようだ。
「明日から、ようやくノンビリと豆の甘煮を食べられるわ」
その言葉を聞いて、浩二は初めて彼女が食べ物を食べている光景を思い出す。
（そういえば、幽霊でも味の好みがあるんだよな。幽霊って食べ物は何も食べないイメージがあったのに）

「……ん？」
　ふと、浩二は不思議な違和感を感じ取った。木棚の角へ目線を移すと、指先大の小さくて赤い光が点滅し始めている。浩二にしかわからないが、赤い光の中には何やら紋様のようなモノが浮かび上がっていた。
「台所に忍び込んで食べ物を漁ろうなんて……」
浩二が人差し指で赤い光に触れた途端、“バチッ”と静電気が放電されたような音が台所に鳴り響く。
「キャーーー！！？」
それと同時に、マスコットみたいな赤い毛むくじゃらが三匹程飛び跳ねるのが見えた。
「そうはいかんよ」
ささやかな攻撃を受けた毛むくじゃら達は全速力でウカノの膝上へと逃げていく。

彼女は優しい笑みを浮かべながら、膝上に飛び乗ってきた毛むくじゃらを一匹ずつ撫でていく。すると、所々すすけていた毛むくじゃら達が元の姿を取り戻していった。
「食べ物を盗み食いをしようとしちゃ、ダメでしょ。自分の好物は、ちゃんと戦って勝ち取らないと」
彼女の言葉を最後まで聞いて、それまで頷いていた浩二は思わず肩を落とす。
「笑顔で言うような事じゃないだろ、それ？　毛むくじゃら達に変な気を……」
「おーはようさん」
浩二の言葉を遮るように玄関の戸が開くと、確実に起きたばかりのくぐもった声が聞こえてきた。声の主はそのまま床板を軋ませ、何か紙がこすれ合う音をさせながら居間へ入ってくる。

　居間に現れたその人は新聞を読みながら歩いていたようで、勝手知ったる我が家のように新聞から目線を離す事無く食卓の椅子に腰掛けた。
「いつものように、クロックマダムとコーヒーね」
エスニック風な麻のロングスカートと黒いキャミソールを着たその女性は、新聞を折りたたむと食卓の上に出しておいたゴボウのピクルスを心地よい音を立てながらかみ砕いていく。顎を動かす度に、バンダナで一つにまとめてあるドレッドヘアーがフサフサと面白い動きを見せた。
「おはようございます、敦子さん。砂糖はいらないんでしたよね」
「そう。ミルクもいらないからー」
彼女はそう言いながら、再び新聞を開く。ちなみに、彼女はウカノの事が見えなかった。
「うーっす」
玄関から聞こえてきた違う声に気を取られてしまい、危なく取り出そうとした一斤パンを落としそうになりながらも、浩二はいつもより少しだけパンを厚めに切る。

厚めに切ったパンの上へ温野菜とゆで卵それにハムとチーズを乗せて、もう一枚のパンで挟んだ。浩二はコンロの火を付けると、上にフライパンを置くとバターを熱で溶かしながら手首の力で回してフライパン全体に拡げていく。
「クロックマダムかぁ、いいなぁ」
　大きな足音を立てながら居間へ入ってきたのは、口ひげを蓄えた割腹の良い男性だ。フレームのない眼鏡を掛けているその顔は中々愛嬌がある。
「あら、黒野さんはダイエットを始めるって言ってなかったっけ？」
新聞を半分に折って敦子さんが顔を出すと、笑いたいのをグッと堪えている変な表情で彼の方を向いた。
「えぇ、まだ頑張ってますよ。敦子さんは、また浩二君が料理を出す前に注文したんでしょ？」
敦子さんに黒野と呼ばれた男性は、彼女と向かい合うように食卓の椅子へ腰掛ける。ちなみに黒野さんもウカノの事は見えなかった。
「だって、“注文しちゃいけない”なんて決まり事はないでしょ？」
敦子さんはイタズラが見つかった小さな女の子のように、小さく舌を出す。

「確かに、大家さんから話してくれた決まり事の中にはありませんでしたね」
浩二はレタスと軽く味付けをした温野菜を添えた皿に、両面がこんがりとしたキツネ色に焼かれたクロックマダムを盛り付けた。
食卓へ運ぶ際、棚の隅に豆の甘煮を持った皿と小さいチーズのかけらが入った皿を置く。豆の甘煮はウカノの分で、チーズは毛むくじゃら達の分である。
「ねぇ、さっき棚の隅に何か置かなかった？」
クロックマダムを敦子さんへ出した浩二に黒野が聞いてきた。
（見られてたのか……）
浩二は心の中でガックリと肩を落とした。
「……昨日の残りですよ。食卓に出そうかどうしようか迷っていて」
「出してくれたら、食べるよー。もう、お腹ペコペコでさ」
「じゃあ、残っている分も盛っちゃうんで……」
浩二はウカノから向けられている厳しい目線を極力きにしないようにしながら、台所へ戻る。

「おはようございます」
玄関の方から礼儀正しい女の子の声が聞こえてきたのは、黒野さんに大豆肉のカツレツと温野菜のサラダ、豆の甘煮と切り干し大根の味噌汁、そしててんこ盛りの八穀ご飯を出し終わった時だった。
“パタパタ”というスリッパを履いた足音と同時に、まず長くてツヤのある黒髪の先が見える。そして、すぐに紺碧（こんぺき）色をしたスモッグのワンピースと、利休白茶(りゅうきゅうしろちゃ)色をしたリネンのパンツを着た女の子が現れた。二の腕までまっすぐ伸びている彼女の黒髪はトレードマークと言えなくもない。
「おはよう、斑鳩さん」
「お、おおおはよう、蒔絵ちゃん」
明らかに黒野さんの声が二オクターブぐらい上がったので、それを聞いたウカノが声を上げて笑い出した。静かにするようジェスチャーを送ろうとするが、思いとどまる。斑鳩さんもウカノの事が見えていなかった。ウカノの方は彼女の髪の毛を撫でるのが好きらしいけど……。
「あ…っらぁ……、黒野さん？　何か、私の時と反応が違うと思わない？」
いつの間にか、黒野さんの背後に機嫌の悪そうな敦子さんが立っていた。
（こ、これは……気付かなかった事にしよう、うん）

「いえいえいえいえいえいえいえいえ、違うんですよ」
黒野さんがかなり慌てて敦子さんに弁明している姿を見て笑わないように気を付けながら、浩二は台所へ戻る。
「さて、斑鳩さんにも朝ご飯を出さないとねぇ」
パンにするか八穀ご飯にしようか迷っていると、斑鳩さんが台所を挟んで浩二の前に立っていた。
「これ、お母さんからです。何でも、近所に新しい天然酵母のパン屋さんが出来たとかって」
「新しいパン屋さんですか？　この近くに？」
浩二は斑鳩さんと話をしながら、彼女が差し出してくれた紙袋から飛び立った蝶の形状をした黒い靄をチラッと見る。その途端、口の中を変な苦みが走った。
（魔力か……）
「力の残りモノって感じだね」
豆の甘煮を一粒一粒丁寧に摘んで食べていたウカノも、蝶の形状をした黒い靄が飛んでいく方を見ている。

「せっかくですから、このパンでフレンチトーストにでもしましょうか？」
「それ、良いですね」
　斑鳩さんは浩二の提案に嬉しそう頷くと、食卓へ向かうために後ろを向いた。その瞬間を見逃さずにウカノと目線を合わせると、ウカノの目線から力を行使するための構成図が浩二の頭の中

へ流れ込んでくる。浩二はそれを自分の中に存在するとイメージした力の動力炉へ直結させると、台所にある調味料入れから粗塩を少し摘み取って息を吹きかけた。
　空中へ舞い上がった粗塩は飛んでいる蝶の形状をした黒い靄付近で一つにまとまると、瞬時に蛇のような口を形作って霧を噛み砕いてから四散していく。
（何だ、あのイメージは……）
浩二はウカノの方を向いて小さく溜息を漏らすと、彼女は手を口に当てて上品に笑って見せた。
　気分を切り替えて袋から取り出した天然酵母の食パンを切り分けると、それをオーブントースターの中に入れる。浩二は念のために力を込めた粗塩をトースターの底に撒くと、軽く焼くためにタイマーをセットした。

　浩二は背筋に少しだけ寒気を感じたので振り返ると、そこには艶やかな褐色の体毛を揺らした大きな犬が座っていた。どれぐらい大きいかと言うと、座った状態で浩二と目線が同じ程……。その大きな犬は鼻をヒクつかせた途端、眉間に深い皺を寄せた。
「浩二殿、何か力を行使しなければ行けないことが！？」
犬が人間の言葉で声を荒げるが、敦子さんや黒野さんや斑鳩さんは一向に気付かない。この犬は、ウカノと同じように彼らには見えない存在だった。
「念のためよ。朝からそんなにキャンキャンキャンキャン吠えないの、アマテラ」
浩二が答える変わりに、ウカノが変わってアマテラと呼んだ犬に答える。
「来る途中に蒔絵様の周囲を飛んでいた蝶は私が払いましたが、他にもいたんですか？」
　浩二は軽くトーストしたパンを卵と豆乳、それにシナモンパウダーを入れた漬け液の中に入れようとしていた手を一瞬止めた。
（さっきのが、もう一匹？）

　浩二は、カスタード風味やシナモンパウダーの香ばしさの中に潜む甘さが食欲を増してくれるアツアツのフレンチトーストを斑鳩さんに出した後で、自分も一切れ摘んでみた。噛めば噛むほど卵や豆乳の甘さとパン自体の甘さ、バターの甘さが重なっていく。
（霧が残っている味はしないな……）
「力の残りカスとは言え対抗の無い人が吸い込んだら体調を悪くする霧を二回も出すって言うのは、かなり大事よね」
浩二は誰も見ていないことを確認してから、ウカノの言葉に小さく頷いて見せた。
「私が後で様子を窺ってきましょう」
アマテラの声を聞いて、浩二はアマテラにまだ何も出していない事を思い出す。豆乳を冷蔵庫へ戻すときに、サラダが入った小さいボウルを取り出してアマテラの前に置いた。
「いつもいつも、ありがたいことです」
（アマテラっていつも野菜ばっかりだよなぁ）
ウカノ達もそこら辺の事情は知らないらしい。

好右 浩二の家

「一週間もごちそうさま～」
「たまにはご飯に呼んでね」
「御馳走様でした」
朝食を終えた三人が帰って行くと、浩二はようやく一息ついた。
「それじゃぁ、そろそろ調査開始ね」
ウカノが食卓の椅子の方へ腰掛けると、毛むくじゃら達もそれに続く。
「そうしたいところだけど……」
「だけど……何よ？」
ウカノが目線を浩二へ向けた途端、彼のお腹が盛大に空腹を訴えた。
「まずは、朝食にさせてくれよ」
ウカノも、彼が朝食をまだ食べていない事をようやく思い出す。
「あれだけご飯作ったんだから、もう食べ終えてたんだと思っちゃったわ」
「そうなんだけど、やっぱり身体は正直者でさ」
二人は同時に吹き出すと、笑い合った。